

# ろば



## 百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時30分  
於 東京家政専門学校2階  
聖書研究会：第1・3水曜 午後7時  
於 石原宅

連絡先：〒162-0066 東京都新宿区  
市谷台町14-1-701 賈晶淳 方  
TEL/FAX 03-6273-2930

<http://www.hyakunincho-church.com>

郵便振替口座：00180-8-565379



### 私の目線（八〇）

#### 児童福祉の現場から

空閑 幸

私は現在、自分の勤務先である区から研修派遣という名目で、都内の児童相談所で児童福祉司として今年度より勤務している。これまで児童相談所は都道府県が管轄しており、その他は政令指定都市などの大きな自治体しか設置できないとされてきた。しかし、法律が改正され二三区にも独自に開設できることになった。そこで、荒川、江戸川、世田谷の三区が他区に先駆け二〇二〇年春にオープン予定、その後に残りの区が続いて開設していく予定となっている。来年度からはさらに、「先行三区」は都から区へのケースの具体的な引継ぎをしていかななくてはならない。しかし、現場の職員は常に人手不足で膨大なケース対応に忙殺されている状態であるため、スムーズに移行できるか気になるところだ。現場にいる新任児童福祉司に至っては、困難ケースや判断に悩んだ際にすぐ相談できる中堅やベテラン福祉司が少ないので、右往左往してしまうこともしばしばで、現場は非常に疲弊している。そして、ニュースにも度々取り上げられているように、厳しい視線や論調にも晒されている。「もしも自分の担当ケースに何か起きたら・・・」というものすごいプレッシャーに押しつぶされそうになりながら、その一方で担当ケースの親や関係者から罵声を浴びせられたり、執拗に精神的に追い詰められたり、刃物が出てきたりするようなこと

も決して珍しい話ではない。事態はもはや一介の職員や児相だけでは解決できるような問題ではないと感じている。児童福祉司の人員増強についても、一年目に一〇〇人入職して五年目には一〇人残っているかどうかという本当に厳しい現場のなか、モチベーションが高い人でも容易にバーンアウトしてしまうようなところなのである。児相を叩くのは簡単だ。しかし、現場だけでは権限がなく介入が難しいケースも数多く存在する。職権濫用にもなりかねないため、子どもを一時保護する際には非常に慎重に調査を進める必要がある。そして、そういったケースを一人の児童福祉司が何件も抱えている。しかも、自分のような新任児童福祉司はどのようにケースを進めていけばよいのか、自分の対応は間違っていないか、正直なところ経験不足で不安いっぱいなのな対応している。判断に迷ったときにすぐに聞ける先輩がいても先輩達も多くのケースを抱え、日々あちこち飛び回っている。先輩方も忙しすぎるあまり、新人たちも質問することもなかなかできない。そんな現状だということをもっと国や社会には分かかってほしい。ただ頭数だけ沢山入れれば済む話と違った単純な話ではなく、人材を育成してノウハウを蓄積し、スーパバイズ機能がしっかりとした職場が必要であると強く感じる。本気で今、人材育成について皆で真剣に考えていかないと、いつまで経っても現場の児童福祉司の定着は見込めないだろう。

## 「分裂」と「平和」

## ルカによる福音書一二章四九―五三節

賈 晶淳

先週の日曜日（二月二四日）に普天間米軍基地の辺野古移転の賛否に関する沖縄県民の投票がありました。投票率が五二%を超え、内反対が七二%を超える結果がでました。この他にも未発表の統計として年齢や地域などに関する細かい数値もあると思います。そして、それでは確認できない夫婦や親子などの間にこの問題についての理解や立場などで家族の中で分裂や対立が起こっている家庭も当然あると思います。同じく、村人や同僚や友人の間でも分裂や対立があったと思います。今日の聖書の五二節と五三節のイエスの言葉には家族の中で対立して分かれが生じると書かれています。

今から後、一つの家に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と、しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、対立して分かれる。

そして、四九節以下ではその原因がイエスご自身にあると言っています。

わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。

随分厳しいことが書かれています。ここ

でイエスが聴衆に一言おうとする内容は五〇節だと思えます。

あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。

逆説的な言い方だと思えますがこれをどう理解すればいいのか極めて困難な内容です。以下では真髓を理解することはできないかも知れませんが自分なりの接近の仕方です。試してみます。ここで私たちの理解を混乱させることは私たちが持っている「平和」や「分裂」という概念についての価値観だと思えます。「平和」は常に良いことで正しいことであり、「分裂」は常に悪いことで正しくないことだと思うのが一般ではないかと思えます。私たちのこのような理解とイエス、或いは聖書の理解が相反するものかを確認する必要があります。ここでいう「分裂」と「平和」はある個人の精神的な安定や不安を言っているとは思いません。家族間の不和を例示しているところから社会的な問題だと思つてよいでしょう。そうしますと当時のパレスチナの社会的状況を確認してみることが理解を助けることになると思えます。

イエス時代のパレスチナの社会的状況はその歴史的状况と密接な関連性があります。それは遡りますと紀元前六世紀にパレスチナ全域が新バビロニア帝国の支配下に置かれて以来、ペルシア帝国、マケドニア帝国、ローマ帝国へと次々に支配する国が入替わる中、

その六〇〇年近くを他国の支配を受けて来た歴史における問題です。勿論、その間ユダヤ教は独自の宗教として進歩を続け、堅い共同体としての根幹を成して来た歴史でもありません。そのような歴史がパレスチナの社会的な状況を大変悲惨なものへと変えたことを想像するのは難しくないことと思えます。当然のことですが「分裂」と「平和」という言葉は当時の人々にとって最も切実な問題だったということです。このような状況は現在の沖縄とオーバーラップするところがあります。

先ず、この時の分裂について考えてみることにします。バビロン捕囚期からユダヤ人の共同体は世界中に分散して生きるようになります。そのような人々やグループを「ディアスポラ」といいます。世界各地に住んでいる彼らは言語もバラバラです。互に通じない言語を使っていましたので分裂は当然のことだと思えます。ペンテコステの事件は世界各地からのディアスポラの集まりで、言語的に一つになったという象徴的な意味を持っています。また当時のユダヤ教は多くの宗派に分かれていました。サドカイ派やファリサイ派、エッセネ派や過激派、祭司グループや律法学者グループに分かれていました。それに洗礼者ヨハネやイエスのグループも形成しつづかりました。勿論社会を大きく分けるようにしたのは外国の支配です。そしてパレスチナの代理支配者です。それだけではありません。被支配者であるユダヤ人共同体の中にも階層

の分裂がありました。六百年という長い支配期間と次々に入れ替わる支配者は社会状況を捻じ曲げ、分裂や対立などを起し、憎しみやへつらいなどが蔓延する社会へと変えました。当然この状況はユダヤ人共同体を二分させ、支配と被支配構造を作り上げ、搾取、疎外、差別、抑圧などが横行するような社会になります。祭司貴族やサンヘドリン（議会）は支配者の手先機関として貴族層になっていきました。中間層としては搾取機関として有名で聖書にもよく登場する、人々に憎まれていた収税人や土地管理の代理人などがいます。当時の社会構造上彼らはある程度の富を基にして支配者により多くの額を収める者が選ばれた仕組みになっているため、当然被搾取側の状況は益々厳しくなっています。その社会的状況の中で一番多かったのは土地や働き場を持たない貧困層です。彼らは常に飢えと闘わなければなりません。彼らを想像するのにはイエスの周辺に集まる人々を見ればわかります。女性や子供の数を入れないで田舎に四千人とも五千人ともいう人が集まったというのは、その上二日も三日も食べていないという言葉もありますので、それだけ仕事がなく飢えていることです。このように当時のユダヤ人社会も耐え難い分裂状況が数百年間も続いてきたのです。この混乱した時代を是正したいという動きは当然いろいろとありまして、人々は皆シャローム（平和）を求めています。

しかし、当時の社会では「平和」に関する思いがいろいろと違っていました。支配者ローマが求めていた力による平和、中間支配層が求めていた妥協的平和、一部宗教グループが求めていた逃避的な平和、或いは武力による平和など。そして、自分たちの力ではどうしようもないと思っていた大多数の貧困層の人々が求めていた唯一なる期待とは新しい指導者が現れるのを待つことだったでしょう。洗礼者のヨハネもその一人で、イエスもその一人でした。この二人が共通に言い出したのは「神の国の宣言」です。人々はそれを神による直接支配、神による平和の世界だと受け止めました。即ち、この宣言は神以外の支配を一切認めないという驚くべきものでした。

次は「分裂」という言葉についてですが、日本語では「分裂」という意味は否定的にニュアンスしかありませんが、英語の *divide*、*division* は分裂だけでなく、分ける、分離、配分や共有するという意味まで持っています。ギリシア語の *diameirizo* も同じく分ける、分配する、分離するという意味です。そして語尾の *meirizo* だけでも分けるという意味があります。ここで *meira* という語頭には通じる、通すという意味があります。この語頭を持つている言葉にはディアスポラやディアコニア（奉仕）というのがあります。ギリシア語聖書が *meirizo* ではなく *diamerizo* を使っていることに目を向けますと、分裂ではあるが根底が繋がっている意味の概念として理解したくなり

ますが無理なことでしょうか。最後にこの聖書の内容は出会いを前提にしています。イエスと民衆との出会い、それによつて分裂や危機が発生し、同時にその出会いは決断と新しい道へと繋がる結果へ導きます。イエス自身もこの出会いによつて決断をせざるを得なくなります。それは何故でしょうか。これまでの歪んだ平和ではなく真の平和を選ぶためです。それは神の支配のみを認めることです。それまでの権力、階層、宗派などを否定することです。ヨハネやイエスのどちらかを選ぶことはありません。神の国、神の支配下で生きることです。

沖繩の人々は今回の県民投票で数の力で沖繩のみの平和を守ろうとしたとは思いません。仕方なく投票という数の分裂を選びましたが、沖繩の人々が真に求めているのは、戦争ができる国を作り、そのため憲法改悪を求めている自民党や安倍政権が考えている平和は偽りであることを宣言し、沖繩の地に米軍基地がなくする時こそ、日本の平和憲法が守られる時こそ、例え今より貧しくなるとしても、沖繩に、日本に、アジアに、世界に真の平和をもたらすことを信じているためだと思います。そのことは聖書を通して教えられた「分裂」と「平和」の間にある意味合いや神の国の宣言が時間と空間を超え、現在でも現実の根底で繋がっているという驚くべき事実を再確認することができたと思います。

(二〇一九年三月三日証詞より)

主に喜ばれることを吟味する

片岡 輝美（若松栄町教会）

二〇一一年三月一日午後二時四六分に発生した東日本大震災によって東京電力福島第一原子力発電所で核事故が起きた。原発核事故は起きないと信じられていた「安全神話」が脆くも崩れ去った瞬間だった。一三日礼拝直後、夫は甚大な地震津波被害を受けた仙台市へ。その夜遅く東京からレンタカーで迎え

に来た長男に、翌早朝四男と姪を託し、三重県鈴鹿市の義弟宅に避難させた。家族や避難者がいなくなった教会は静けさに包まれていた。私は故郷・会津若松から避難はしなかった。牧師の妻だから教会に留まると決心していた。

しかし、一五日早朝二回目の爆発の報道と同時に私はパニックを起こした。押さえ込んでいた恐怖が吹き出した。目前に小学校卒業式を控え避難を強く拒んでいた甥を妹から引き取り、新潟へ友人らと向かい、上越新幹線で東京へ。東海道新幹線に乗り換えて、前日に義弟宅に到着していた四男と姪に合流した。私はパニックを起こして避難した。しかし、

避難を後押しした言葉もあった。ひとつは、一二日の夜明け前、夫が牧会する若松栄町教会に集まり始めた避難者のひとり脱原発運動のリーダー・宇野朗子（うのさえこ）さんの言葉だ。一二日の正午過ぎ、宇野さんご一家がさらに県外に避難して行く時、彼女は私に「輝美さんが避難しないと周りの危機意識が変わらない。だから必ず避難して」と言い残

した。もうひとつは第二次世界大戦の終わりを旧満州で迎え、棄民となり日本に引き上げてきた両親の「緊急時に国は民を決して守らない。だから自分と子どものいのちは自分で守りなさい」との言葉だった。

二週間の避難の間、私は親しい人々を置いて避難した自分を責め続けていた。十字架上の主イエスを置き去りにした弟子の姿に自分が重なり、涙は涸れなかった。しかし、その間にも宇野さんの言葉が真実であることを経験した。私の避難を知り、親や子どもを連れて避難を決心した友人達がいた。

三月下旬、新潟の敬和学園高校に四月から進学する四男と帰宅し、二〇〇五年から共に活動している九条の会メンバーと再会した。二〇一一年五月には会津放射能情報センターを発足。そこには真実を隠して安心安全キャンペーンを繰り広げる国と福島県、福島県立医科大、そして東京電力に不信と怒りを増幅させる母親が集まってきた。その中に、避難区域外から避難して来た多くの家族や母親がいた。彼女たちは放射能汚染と被ばくに不安を覚え、「国や著名な科学者を信用できない臆病で無知な母親」と夫や家族から批判され、孤立感に苦しんでいた。

会津放射能情報センターでは多くの呻きが聞こえてくる。「私は避難者になったら、直ぐに県や国が助けてくれると思っていた。でも、一年経っても何の支援もない。本当にこの国は緊急時でも国民を守らないのですね」と、

ある区域外避難の母親が言った。私の避難を後押しした両親の言葉そのままを、若い母親から聴くことになるとは・・・。自分を守っていると信じていた国に見捨てられ、子どものいのちを守るためには国と対峙しなければならぬと知った時の衝撃と恐れを母親たちは涙ながらに訴える。そして、それは「なぜ、こんなことが我が身に起きるのか？」との問いになっっていく。

福島原発核事故以降、聖書に登場するマリアとヨセフはより現実的な存在となった。なぜならこのふたりの人生こそ「なぜ、このようになことが我が身に起きるのか？」との問いの連続だったからだ。始まりは受胎告知。マリアの動揺とヨセフの疑心は計り知れない。さらに出産直後に、イエスのいのちを守るため、誰に追われているのか分からない、ただ夢で告げられたことだけを信じてエジプトに避難するふたり。この姿は、放射能を恐れ避難してきた親そのものだ。そして親としては耐え難い我が子の十字架上の死。なぜ、我が子なのか、なぜ、私なのか？とマリアとヨセフは繰り返すこの問いを神にぶつけたらう。

二〇一一年三月一日午後七時三分に発令された原子力緊急事態宣言は未だに解除されておらず、福島原発では困難を極める廃炉作業が続いている。闘う相手は自然と放射能。人間は自然の前に無力であり、核の領域に入ってはならなかったのだ。日々、豊富な地下水が原発建屋に入り汚染水となっっていく。東

電はロボットでも太刀打ちできない高線量の中にある融け落ちた燃料デブリを取り出そうとしている。さらに、一二〇以上の酷く汚染された鉄塔の上部六〇以上の解体作業が間もなく始まる。日々これらの廃炉作業にあたるのは作業員六千人。この人々の働きなしに、私たちは八年余りの日常生活を送ってくることはできなかった。私たちはこの事実を意識しているだろうか。私たちは作業員の健康や人権について無関心であっていいのだろうか。

放射能被ばくを恐れ国や東電に怒りを持つ人々と会津放射能情報センターはこれまで活動を重ねてきた。安全を確認するために空間・土壌・食物に含まれる放射線量の測定を継続し、しゃべり場や内科医・精神科医による健康相談会の定期的な開催、学習会や保養プログラムの実施などを重ね、人々とつながり続けている。

情報センターは市民団体ではあるが、キリスト者である私にはこの活動の目的は、「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。」(フィリピの信徒への手紙一章九―一〇節)にあると実感している。放射能被ばくでいのちが脅かされる時代において、事実を知る力と真実を見抜く力、そして本当に重要なことは何であるのかを見分ける力を、悩む者たちがお互いの存在や決断を大切にしながら身に着けようとしてきた。事実、私たちは福島原発事故から苦しみな

がら多くを学び、いのちを守れ!と声を上げ続けている。しかしながら、この国は福島原発事故から何も学んでいない。それどころか三・一一前よりも悪化している。

炉心溶融が始まった原発の暴走を国も東電もコントロールすることはできなかった。だから、国民に流す情報をコントロールし、汚染の現実に合わせて放射線防護の基準を緩め始めた。そして今、原発事故被害の「見えない化」を強行している。汚染水の海洋放出、汚染土の焼却や全国公共事業での再利用、多発する小児甲状腺ガンの発症原因は被ばくの影響とは考えにくいとする福島県の見解、避難区域解除と支援打ち切りで避難者に帰還と自立を迫る施策、復興予算終了を理由に撤去されようとするモニタリングポスト二四〇〇台…。不都合な原発事故被害を見えなくすることで、原発事故は起きても大丈夫との「安心神話」を確立しようとしている。安心神話の目的は原発再稼働の加速である。そして、再稼働によって再び事故が起きても「自ら復興している福島」をお手本に引き出し、原発事故は起きてでも避難する必要はないと説得し始めるだろう。

復興に若者が使われている。著名な科学者が将来に不安を覚える若者に福島の安全を宣言する。そのことにより、原発を巡る様々な課題や事故被害など、本来「なぜこのようないことが起きたのか」と深く考える機会が、若者から奪われていく。そして彼らは思考停

止に陥り、復興の担い手となることを目指す「理想の被害者」となっていく。

光の子としての歩み、賢い者としての歩み、時をよく用いること、無分別な者とならず主の御心を悟ること…これは主から与えられたいのちに誠実に向き合う生き方だ。しかし、この時代、誠実に生きようとすればするほど、「なぜ、このようなことが我が身に起きるのか」と問う現実がぶつかり、苦悩する。

苦悩するマリアとヨセフの問いに、主がどのように答えたのか、私たちには分からない。しかし、ただ信じたいのは「これは、あなたにしか担えない役割なのだ。私はあなたを決して見捨てない」と主が苦悩する彼らの傍らに立ち続けたことだ。

「吟味する」とはよく調べて選び取ること。私たちはどのような生き方を選び取っていくのか。そしてそれが託された役割として、誠実に担っていくことができるのだろうか。「人よ、何が善であり主が何を前にもとめておられるかはお前に告げられている。正義を行ひ、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」(ミカ書六章八節)人間が正義を行わず、慈しみを愛さず、傲慢な思いに取り憑かれた故に起きた福島原発事故。ならば、その拭いきれない罪に気づいた今、私たちが選ぶ生き方は明らかだ。決していのちを脅かす核との共存ではない。復活の主イエスが示したいのち尊ぶ生き方を選び取りたい。(二〇一九年二月十日証詞より)

## 「沖縄発 新しい提案」について

松浦 真理子

この「ろば」が出る頃には沖縄県民投票も終わっていますね。そうしたら今度は私たち本土の人間が考え行動する番です。そのため昨秋出会った「沖縄発 新しい提案」を紹介したいと思います。これは沖縄の市民グループから日本への「民主主義の提案」です。沖縄の出版社「ポーターインク」から「辺野古新基地を止める民主主義の実践」という副題で本も出ています。

① 辺野古新基地建設工事を直ちに中止し、普天間基地を運用停止にすること。  
② 普天間基地の代替施設について、沖縄以外の全国のすべての自治体を等しく候補地とすること。

③ その際、米軍基地が必要か否か、普天間基地の代替施設が日本国内に必要か否か当事者意識を持った国民的議論を行うこと。

④ 国民的議論において普天間基地の代替施設が国内に必要なという結論になるのなら、その結果責任を負い、民主主義及び憲法の精神に則り、一地域への一方的な押し付けとならないよう、公正で民主的な手続きにより決定すること。

ご存知のように、沖縄は日本によって差別され続けてきた歴史を生きてきています。「日本」って、「日本政府」とも考えられるけれど、それを作っているのは私たち。つまり差別してきたのは私たち。そう思うと苦しくなりま

すが、それが事実です。ですから怒っても当然の沖縄の方々がこんなにも冷静な提案を下さっていることに、私は頭が下がるし応援しなければと思います。また若い世代が先輩達の体験・思想を受け継いで未来を創っていくとしていくことに感激します。

この提案に至るまでのプロセスにも一つ一つ納得がいきます。例えば、沖縄の基地の話になると主な反応は次の四つだといえます。  
① 「基地をなくして他国に攻められたらどうするんだ！非現実的だ！」

② 「沖縄の問題でしょ？自分には関係ない。」  
③ 「沖縄の負担は減らすべきだと思うけど、自分の町に基地が来るのは嫌だ。」

④ 沖縄にいらぬものはどこにもいらぬ！県外移設なんてもつてのほか！」

「新しい提案」ではこれは全て「構造的差別」としています。③④は沖縄の基地に反対はしていますが、実際これでは辺野古新基地を止めることはできないわけです。

でも沖縄はもう限界です。それに辺野古は二六二種の絶滅危惧種を含む五八〇六種もの生物が生息している、生物多様性のものすごく豊かな海です。ここを埋め立てて基地にするだなんて、私たち人間みんな、いや地球にも限界がきてしまうのではないのでしょうか。

だから、本当は「沖縄問題」ではなく「私たちの問題」。そう捉えるための「新しい提案」なのだと思うのです。米軍基地のことを自分のこととして考えることができれば、日米地

位協定や安保条約を見つめ直すことも視野に入ってくるかもしれません。

それからもう一つ、私は最近、児童虐待や子どものいじめのニュースを見る度に沖縄のことと重なって見えるのです。虐待やいじめのニュースにはみんなが「ひどい！何とかしなければ！」と思うでしょう。一方沖縄・辺野古では人々が身体を張って権力による暴力に対峙しています。「もう限界！助けて！」と声を上げています。それをやめない、強行するこの社会の在り様が子どもたちへの虐待やいじめを生み出す温床となっているように思えてなりません。そして子どもたちはこの社会の中で社会の在り方から学んで大きくなっていきます。そうしてまた社会の担い手になっていくのです。そう思うと、私たち大人はまず大人社会の大きな虐待・いじめから止めていかないといけないのではないのでしょうか。

今回の沖縄県民投票は若い層からの呼びかけで実現することになったそうです。しかし五つの自治体がそれぞれの理由から不参加を表明。でもそこからまた対話を重ね、県全体で実施できることになりました。この流れからも沖縄の人たちは民主主義を実践していることがわかります。

さて私たちの国、日本はどうでしょうか？差別を意識してなくそうとしているのでしょうか？民主主義を実践しているのでしょうか？私自身も自分に問いかける毎日です。

## 百人町教会の五〇年に寄せて

## ろばの家の誕生と変遷について

高瀬 浩之

ろばの家誕生前後（一九八三年頃）。私が百人町教会の聖書研究会メンバーであったこと。東京都の養育家庭制度（養子縁組を前提とせず、一定期間家庭で子どもを養育する）の下、二人の男児の養育に携わっていたこと。それらのことから、国がまだ制度化していないが、東京都が施行し始めたファミリーグループホームを指すようになった。二室十畳以上で出来る養育家庭から四LDK以上が基準となる制度に移ることは、当時東村山市にあった都営住宅に住んでいた私達夫婦にとってハードルの高い問題だった。

そこで、聖研を中心に「ろばの家応援団」が結成され、基準に合う物件探しが始まった。私はB型肝炎治療の為八五年一月入院していた。聖研以外にも定期的に応援団役員会が開かれ、ファミリーホームろばの家設立に向けて動き出した。西八王子駅から徒歩一八分位の所にある物件を団長さんが見つけてくださり、借入、寄付と資金は百人町教会内外から得られ、持ち家として購入する事が出来た。資金返済については財務担当者が返済計画を作成して下さり、それによって無理のない返済を行うことができた。

一九八六年三月より東村山から引越しが始まる。私は入院中でほとんど動けなかったが三月末にやっと退院し、男の子三人と夫婦の

五人で八王子での生活が始まった。家の間取りは一階に八畳と六畳の和室、六畳の洋室、台所、洗面所、トイレ。二階は六畳と四畳半の和室と洗面所がありそれぞれの部屋には充分な収納スペースがあり、南側に隣家の広い駐車場、西に広い畑、北には広い養鶏場があり、私にとって昔懐かしい光景だった。一夜開けて最初の朝、鶏の雄たけびにびっくりして飛び起きたのを覚えている。通勤距離が以前に比べて短くなり通院治療していた私にとっては大変助かった。当時礼子は専業主婦で主たる養育者の役割を果たしてくれた。

一九八六年の夏休みに女の子が加わり、四人の子どもを養育するファミリーホームとしての歩みが始まった。この四人との生活は一〇年余り続いた。夏休みにはワゴン車で北海道の温泉地やキャンプ場に泊って、ご当地ならではの食べ物や生活をみんなで一緒に楽しんだ。

四人の子ども達が高校生活をほぼ終えてろばの家を巣立って行き、ファミリーホームが終了し養育家庭を終わりにする事も考えた。が、里親制度の研修も内容が確立されてきて学ぶことが多くあり、せつかく身につけた子どもの心に向き合う経験をもっと生かしたい、子どもが地域で暮らし続けられるために、ささやかながらも貢献したいと、ショートステイの登録をするために里親登録を継続した。それからは年齢を問わず受け入れ可能ならば長期より短期間の養育をする家庭にシフトし

てきた。有難いことに、五五歳の時肝炎も完治したので、早期退職をして、二〇〇〇年から私の勤務が非常勤になる。そこで私が主たる養育者になり、礼子が市役所の職託職員として働くようになった。養育家庭・専門里親・ファミリーホーム・フレンドホーム・八王子市のショートステイと子どもたちのニーズに合わせて私たちが里親の立場を変えて応じてきた。第二若駒のメンバー（重度重複障害者）によるグループハウスのろばの家の利用（当時制度としてはなかった）もあった。

別府で一人暮らしをしていた礼子の母と最後の一年間を暮らしつつ、児童相談所一時保護と、緊張の続く子どもたちとの生活のなかから貴重なことを学ばされたが、役割は山積、元来血圧の低い私が、どんどん急上昇する血圧に限界と感じ養育家庭も辞退することに至る。二〇一八年のこと。

四〇年の長い期間だったが、今となってはアツ！という間にも思える。五年くらい前から「養育家庭が終わった後のろばの家の有効活用」を話し合ってきた。地域の子ども食堂を試行したり、居場所として先ず自分たちが安心して居られる事を第一に話し合ってきた。経年劣化、リフォームと現在は友人と協働して、生活しつつ試行している。文字には表せない内容も経てきたが、今後も「まだ制度としては無いが必要なこと」を始めようと話し合っている。ろばの家が誕生して三三年だが、まだまだ変遷の道途中である。

## 図書紹介

## 『原発問題の深層』

— 宗教者の見た闇の力 —

内藤 新吾著(かんよう出版)

東日本大震災から、八年という月日が経ってしまっただけで、あの日に生を受けた子どもは、この春小学校二年生に進級する。あの日、大気の中に拡散し、森に降り注ぎ、大地を汚し、海に流れ出てしまった「恐ろしいもの」は全く目に見えないのに、全ての生命あるものの根源を破壊し続ける。収束までの道のりは人の一生の枠をはるかに超えているというのに、嘘に基づいた安全神話の下、事故からたった数年で、何事もなかったかのように私たちの社会は流されていく。子どもたちの健康は損なわれ、避難者の生活は捨て去られ、破壊された建屋に入り一刻一刻に命を懸けて作業に当たる労働者たちの日々があるというのに。内藤牧師は、一九九三年、初任地名古屋で、長いこと被曝労働を繰り返してきた一人の男性と出会い、二冊のファイルを手渡された。その出会いを通して原発労働がどこまで悲惨なものかを知らされ、その日から、被曝労働者たちの恨みつらみを一緒に背負って生きていこうと決断した。その後、浜岡原発近くの教会に転任となり、以来、原発交付金対象の町の中で、不安や異議を唱える市民と共に行政や電力会社とのやり取りを続けてきた。その過程で、真の黒幕は国であり、またその背後には財界があることに気づき、やがてそれ

は確信に変わっていったという。

一九五三年、国連総会におけるアイゼンハワーの「平和利用演説」に始まる原子力発電が、実はアメリカが原発を売ることによって経済破綻を免れようという背景をもっていた。原発という隠れ蓑をもって、世界から核アレルギーを無くし、やがて兵器として使う日のために備えたともいう。唯一の被爆国日本が原発を平和利用として買うことは、アメリカにとってこの上ないキャンペーンであり、日本の財界にとっても、美味しい話だったのである。その目論みの結果が全国に五五基も林立した原発であり、その背後には住民の血の滲むような反対運動で立地を食い止めたいくつもの誘致があったことに気づかされる。この本には、各章ごとにキリスト者としてのまとめがある。「原発問題は、人類が夢見たけれど技術が及ばなかったなどという問題ではない。富と権力を手にしている者たちが、さらに食欲を求めて、いのちのことなど何とも思わず、核兵器を持ち続けようとしていることが、全ての諸悪の根源にあることを忘れてはならない。この問題を直視せずして、節電とか、単なる数値の問題で納めるべきではない。」「教会はこの世の見張り人として立てられている、皆で学び、祈りあい、悪を見抜き、指摘していくものでありたい。」

二年前の出版で、その後状況は動いているが、この書の問いかけはますます重さを増している。

(泉谷 五十鈴)

## ろばのせなか

三月は、春を待ち新しい世界への旅立ちを楽しみにする希望の季節。しかし今の日本に本当の希望はあるのだろうか。八年過ぎた今も東日本大震災に伴う原発問題に終息の気配は見えない。その地に住み会津放射能情報センターを発足させて活動を続けてこられた片岡輝美さんの言葉には、現場を知る人にしかなれない迫力がある。「私達にできる事は？」との問いに「放射能被害は他人事ではない。自分も当事者だ」という意識を持ち続けてほしい」と言われた。教会員の太田道子さんは、福島県いわき市に移住して新しいプロジェクトを始めた。百人町教会としての東北支援も個人的な様々な形での支援も継続したい。

二月二四日の沖縄県民投票では、辺野古移設反対票が多数を得た。特に若者の反対票は多かったと聞く。にも拘わらず政府は今までの姿勢を変えようとはしない。「普天間か辺野古か」ではなく「沖縄から基地を無くす」という選択肢をなぜ付加できないのかと思う。ずっと沖縄問題に関わってこられた松浦真理子さんの文章を何度も読み返してしまふ。

児童相談所の現場で働く空閑幸さん。帰宅が深夜に及ぶことも度々というハードな職場にあつて心身の疲労は極限に達しているだろう。子どもを守るために法律や制度を作るのは国の仕事だが、もつと大切な一人の心を育てる」という責任は私達おとな一人ひとりにあると思う。

(榎本 征子)